

拝啓 めぐろシティカレッジ 受講者の皆様

めぐろシティカレッジでの授業の他に、私は高校と大学で授業を担当しているのですが、コロナ禍により、大学は遠隔授業になりました(私の担当する授業では、秋学期も継続します)。高校も4月から遠隔授業でした。

遠隔授業は初めての経験なのですが、私は主に、パワーポイント資料に自分の音声をつけて、それを生徒や学生が自分たちの都合に合わせて視聴するオンデマンド型で対応しました。

しかし、勤め先の高校では、8月下旬から対面型の授業にもどりました(様々な細かい感染症対策を設けてのうえです)。週に4日通っています。そこで、改めて実感したことはコミュニケーションの量、質、深さ、繊細さにおいて対面での授業が一番優れた形態であるという確信でした。

私はこの確信を一日でも早くめぐろシティカレッジの授業でも再認識したいと願っています。コロナウィルスの感染が終息して、いつも通りの、元通りの、めぐろシティカレッジの復活が待ち遠しいです。

日々、悶々としているなか、拙いエッセイを書きました。ご一読くだされば幸いです。

敬具

令和2年9月

めぐろシティカレッジ カリキュラム委員

越田 年彦

めぐろシティカレッジ エッセイ No. 3(令和2年9月発行)

ペストとコロナ

越田 年彦 慶應義塾大学訪問教授

経済学部に進学したものの、いわゆる近代経済学の思考のフレームワークに違和感を抱いてしまった私は、経済学本体よりもその周辺部にあたる思想や哲学に関心を持つようになりました。20代前半の当時、マルクス主義とともに実存哲学(実存主義)が一世を風靡していたことから、フランス現代思想に親しみを感じ、その流れでアルベール・カミュ(1913-1960)の作品は熱心に読んだものでした。『異邦人』(1942年)、『シュースポスの神話』(1942年)、『転落』(1956年)といったあたりでしょうか。しかし、『ペスト』(1947年)は未読でした。概してカミュの作品は短いのですが、『ペスト』は大作でそれなりの覚悟があると自問しているうちに読む機会を逃してしまったのが理由です。

しかし、新型コロナウイルスの広まりに端を発して、『ペスト』が読まれていると聞き、私も遅ればせながらその波に乗って『ペスト』を紐解く決心をしました。そして、つい最近読了した次第です。

このエッセイでは、私がこの作品を読んで思い及んだ種々のことがらを語ってみます。ただし、『ペスト』を読むに至る動機が現在のコロナウィルスの蔓延が念頭にあることから、この作品の文学的価値や背景、登場人物の発話分析を論じるのではなく、この作品から今日私たちが抱えているコロナ問題を引き出してみることに主眼です。

そうである以上、ストーリーの詳細を説明することは控えます。それは冗長ですし、また粗筋や結末が分かってしまうとこれから読みたいと思う方の氣勢をそいでしまいます。ただし、最小限の説明に止めるならば、おそらく 1940 年頃（ある登場人物が、スペイン内戦の後と発話するくだりが一箇所あります）、アルジェリアの都市オランでペストが流行し、都市封鎖の中で医療活動に尽力する医師リュウを主人公に、リュウ及び彼を取り巻く様々な人物が、忍び寄るペストに向い合いながら、何を語り、どのように行動したのか、こうしたことを描いた作品とだけは述べておきます。

はじめに、この作品のなかから、現在の日本にぴったりの一節から入りましょう。

「今度のペストは観光旅行の破滅であった」（新潮文庫 168 頁）。

だからこそ日本では、もっか、“Go To トラベル”が行われているのだ、と墓場の下のカミュが知ったら、カミュはどう思うでしょうか。大笑い？苦笑？それとも目を丸くしているだけ？

実は、今の日本で蔓延しているコロナ禍とこの作品で描かれている“ペスト禍”とは類似性よりも差異の方が際立っているというのが私の読後感です。

例えば、街の情景の違いです。

「オランはこうして異様な外観を呈するに至った。歩行者の数は目立って多くなり、しかも閑散な時刻にさえ、商店あるいはある種の事務所などの閉鎖でなんにもすることのなくなった大勢の人々が、街頭やカフェにあふれていた」。「もちろん、映画館はこの一般の休暇状態によって利を収め、大もうけをした」（114 頁）。

こうした描写だけではなく、登場人物たちはレストランやバーで飲み食い、仲間とも頻繁に落ち合っています。人がこのように密になることはペストの場合でもよくないはずですが。当時と今の衛生観念の違いなののでしょうか。

行政の対応はどうでしょうか。

オランを管轄する県知事（氏名が不明）は医師リュウなどから、広まっている疫病はペストだと初めて聞かされた時、それを認めまいとする言行を見せるとともに、行政も事態の表面化を防ごうとします。しかし、死者数の増加を目の当たりにしてリュウの忠告を受け入れます。オランの県知事は、ペストに罹ったという申告の義務制、罹患者の隔離、罹患者の家の閉鎖・消毒、近親者の予防隔離、市当局による埋葬、を「自らの責任において」実施するのです（94 頁）。

感染の深刻さの違いから単純な比較はできないのですが、マスクの転売禁止の立法化の遅れ、緊急事態宣言をめぐる国と自治体との一悶着、東京発の第二波の封じ込めの失敗と全国への拡散などを鑑みると医療専門家の意見を受け入れて「自らの責任において」感染防止、都市封鎖に踏み切ったオランの県知事に軍配を上げたくなります。ただし、カミュの書きぶりからは機敏で利発な知事とは思えないのですが。

最も際立つ違いは、カミュの作品では、ペストは不条理の象徴として捉えられていることです。私の読みが適切であれば、カミュはこの作品のなかで、不条理という言葉をはほとんど使用していません。しかし、ペストを不条理のメタファーとして読み込む解釈は定番です。

これに対して、私は新型コロナウイルスによるコロナ禍は人災であり、人が所与として受け入れる他に選択肢がないという不条理とは、似て非なるものであると考えます。そもそも武漢でなぜ封じ込められなかったのかという忸怩たる気持ち（じくじ）が私にはあります。また、日本では立法や行政でのより迅速で実効力のある対応や私たち国民の封じ込め意識の持続と一段の徹底があったならば、少なくとも緊急事態宣言解除後の再流行はかなり防ぐことができたのではないかと思います。皆様はいかがお考えですか。

現下のコロナ禍とカミュの“ペスト禍”の間には、違いが目立つとして差異の指摘を次々に挙げていますが、医療従事者の取り組みと高い使命感はどちらにおいても変わらないことをきちんと論じたいと思います。

医師リュウは次のように述べています。

「あらんかぎりの力で死と戦ったほうがいいんです。神が黙している天上の世界に眼を向けたりしないで」（188 頁）。

リュウはペストに罹患した患者 1 人 1 人に血清を打つ、腫れたリンパ腺腫を切開するなど自分の感染の恐れも物ともせず、医師として死と戦っています。

「今度のことは、ヒロイズムなどという問題じゃないんです。これは誠実さの問題なんです。こんな考え方はあるいは笑われるかもしれませんが、しかしペストと戦う唯一の方法は、誠実さということです」（245 頁）。

リュウにとって誠実さとは「自分の職務を果たすこと」(245 頁)なのです。今、コロナウィルスに立ち向かって全国の医療従事者の方々が日夜格闘しているのも、リュウの言う誠実さを支えにしているからであるに他なりません。今年の 3 月に医師国家試験に合格し、4 月に赴任した病院でいきなり呼吸器内科に配属された研修医がいることを私は知っています。その人も誠実さを擁してコロナと戦っているに違いありません。

カミュ自身も次のように書いています。

「問題のすべては、できるだけ多くの人々をして、死んだり終局の別離を味わったりさせないようにすることであった。そのためには、ただ一つ、ペストと格闘するという方法以外にはなかったのである」(195 頁)。

カミュは医師リュウだけが格闘しているという意味で述べたものではありません。オランの街の人 1 人 1 人が自分の生き様の中でペストと格闘しているという意味を含んでいます。こう述べると、この作品からは現在のコロナ禍との差異よりも相似性、親和性を読み取ったほうが適切なのかも知れません。

現在のコロナ禍にある私たちはこの作品から様々な教訓を引き出すことが可能です。その中で、私が一番印象に残ったくだりを紹介します。

「ペスト菌は決して死ぬことも消滅することもないものであり、数十年の間、家具や下着類のなかに眠りつつ生存することができ、部屋や穴倉やトランクやハンカチや反古^{ほご}のなかに、しんぼう強く待ち続けていて、そしておそらくはいつか、人間に不幸と教訓をもたらすために、ペストが再びその鼠どもを呼びさまし、どこかの幸福な都市に彼らを死なせに差し向ける日がくるであろうということを」(458 頁)。

新型インフルエンザの流行、エボラ出血熱、鳥インフルエンザ、そして新型コロナウィルスなど幾度となく感染症の災禍に私たちは襲われたり、その流行に深い憂慮の念を抱いたりします。カミュの作品に即して述べれば、今回のコロナウィルスを乗り越えたとしても、私たちには、これからもこうした“ペスト菌”のような感染症の災禍が待ち受けているのでしょう。しかし、これを天災として、不条理として受容したりしないで立ち向かう心意気で臨むべきです。そういう社会を目指すべきです。慧眼な医師リュウが理解しているように、たとえ「決定的な勝利」(457 頁)は望み得ないとしても、です。

文献：カミュ 宮崎嶺雄訳『ペスト』（新潮文庫令和 2 年 5 月）。